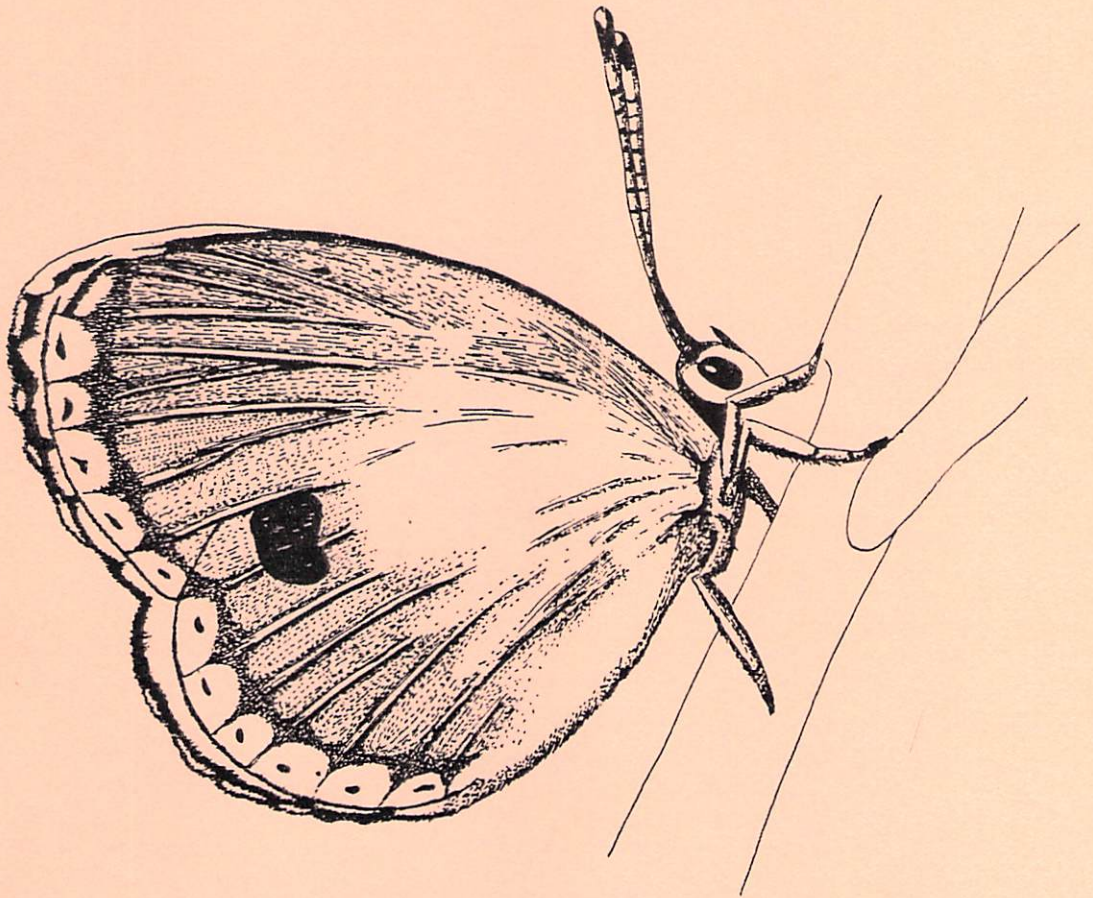


HITOTSUBATAGO No.4

ヒトツバタゴ



Pithecopa fulgens tsushimanus Sirôzu&Urata

対馬生物研究会

December 1986

対馬のシンボルマークとしての鳥花木の選定について
浦田明夫

昭和29年2月、NHK等が共同主催して、都道府県を単位とした「郷土の花」の選定が企画された。その郷土の花の選定基準として、

1. 郷土の誇りとする花
2. 郷土の人に広く知られ、愛されている花
3. 郷土の産業、観光、生活などに関係の深い花
4. 郷土の文学、伝説等に結びついている花
5. その地方だけに見られる珍しい花

となっている。長崎県では同年3月、選定委員会をもち、国立公園雲仙の春を飾り、広く県民にも親しまれているウンゼンツツジを選定している。

また、昭和47年、毎日新聞社が創立80周年記念事業として、あわせて緑化推進運動の一環として都道府県の木を選定することを提唱し、長崎県では県の花木としてツバキを万場一致で決定した。花の美しいこと、五島にはツバキの原生林や巨木があり、ツバキ油の産額も多いことなどの理由による。さらに、もう一つ他県に例をみない県の林木としてヒノキも選定している。また動物は県獣としてキュウシュウジカ、県の鳥としてオシドリを選んでいる。一方、長崎市は、市の花としてアジサイ、市の木としてナンキンハゼを選定している。そこで、対馬あるいは対馬各町で花木の選定がなされているかどうかの現状を知るため、各町教育委員会にアンケート調査を行った。

「調査内容」 昭和61年1月20日調査

1. シンボルイメージとしての町の動植物を指定しているか。
2. 指定している場合は、種名、指定年月日、指定理由を表に記入する。
3. 指定していない場合は、今後指定の予定があるかどうか。

4. 3で指定予定がある場合は、どのような種を指定する予定か。

回 報

町 \ 項	鳥	花	木
巖原	鳥、花、木について指定の予定		
美津島	メジロ	ツツジ	ツバキ
豊玉	コウライキジ	ゲンカイツツジ	クヌギ
峰	指定の予定はない		
上 県	指定の予定はない		
上対馬			ヒトツバタゴ

なお、巖原町は昭和67年が町制30周年にあたり、その記念事業の一つとして巖原町の花木鳥を制定するため、「町報いづはら」で広く町民から公募しているが、このほどこれが内定し、11月3日の記念式典で発表され、制定されることになっている。町民から多数の応募があったが、他町ですでに選定されている種は一応除外して選定されている。鳥ではホトトギス、ウグイス、カワセミなどが最終まで残ったが、結局はホトトギスにおちつき、花はフジ、木は宗家にも由緒のあるキリに決定している。

本会で、こうした調査を行ったのは、自然保護活動の一環としてこれらの生物を前面にたて、今後、自然保護活動を推進するという会の方針に沿って行ったものである。なお、本会では、会独自で対馬のシンボルイメージとしての生物の選定を行いたいと考えている。そして、それが各町から協力が得られるよう呼びかけたいと思っている。

最後ではあるが、アンケート項目等の作成に協力された平山俊章会員、
またアンケートに快く応じていただいた対馬各町教育委員会に厚くお礼申
しあげる。
(県立対馬高等学校)

HITOTSUBATAGO NO. 4

カケスのなきまね

浦田明夫

カラス科の鳥類には、キュウカンチョウやハシボソガラスなど人や他の動物のものまねをすることが知られている。カケスもまたその例にもれない。

筆者が環境庁から許可「許可番号449」を得てしかけておいたカスミ網に、1羽のツシマカケスがかかった。昭和60年10月9日捕獲し、同年10月23日に放鳥するまで飼育した。飼育にはブナ科植物2種（ドングリ類）を与えたところよく食べ、ニワトリの飼料も補助的に与えておいた。

捕獲後数日して庭先でトビの声がしたので見てみたが、トビの姿は見あたらない。しかし、ピーヒョロという声だけは聞こえてくる。鳴き声に近づいてみると、なんとカケスがピーヒョロと鳴いているのである。それから、飼を与える時、ピーヒョロと言うとそれに相づちを打つように鳴き返すのである。これは、幼鳥の時から周りで鳴くトビの鳴き声をまねたものであろうが飼育中は、カケス本来の鳴き声はまったく聞かれなかった。今は亡き長崎県生物学会会員の林敏雄氏もカケスのトビの鳴きまねを記録しているようである。

「参考文献」

1982 林 敏雄 鳥よもやま話 野鳥ながさき NO. 2 P. 8
(県立対馬高等学校)

コクマルガラスの記録
 浦田明夫

コクマルガラス *Corvus monedula* はハトくらいの大きさの小形のガラスで、これまで対馬での記録は筆者の報告他が若干あるだけである。本種には、淡色型と暗色型の2種が知られ、淡色型は後頸、頸側胸腹は白くカササギに似た感じがする。暗色型は後頸から頸側がやや淡色である。ミヤマガラスの群中に見られるのが普通で、特に淡色型はよく目立つが、暗色型はミヤマガラスに比べて小型であることから注意しておけばすぐわかる。このコクマルガラスが渡来していることを、厳原町下原の三山 忠氏から報告を受け、早速現地を調査した。

○1986年2月1日

淡色型	2	暗色型	/	厳原町土富
	/		3	小茂田浜
	/		8	椎根
	/		3	小茂田

○1986年2月9日

淡色型	/	暗色型	//	厳原町久根田舎
			2	椎根
			2	美津島町今里

こうした例をみると、この時期にはかなりのコクマルガラスが渡来していたものと思われる。近年本種は、各地でもよく観察されているときく。

最後に、コクマルガラスの情報を提供いただいた三山忠氏にお礼申し上げます。

「参考文献」 ・1977 浦田明夫 対馬の鳥類雑記 その1
 長崎県生物学会誌 NO.13 P.43~47
 (県立対馬高等学校)

ホオジロの擬傷

浦田明夫

対馬のホオジロは *Emberiza cioides ijimae* STEGNER の学名で示され、和名はイイジマホオジロと呼ばれる。ホオジロより の栗色部が濃いことで別亜種とされており、対馬、宍岐に生息するものは上記亜種に含まれる。

ホオジロは全国の原野、畑、雑木林に多く見られ繁殖している。繁殖期には、なわばりを持ち、その区域内のよく目立つ高い樹の枝、電線、アンテナなどに止まり、チッチッチロロとさえずる。繁殖期は長く、4月から8月まで及ぶ。山麓や原野の低い樹の上、草の間に葉や根などを材料に 形の比較的雑な巣をつくる。卵数は一腹3～6個であるが、一番子より二番子、二番子より三番子になるほど、一般に卵数が多くなるようである。

○1985年5月21日 厳原町日吉 堂巢二羽

上記の巣を発見したとき、♂親が巣の中にいたが人の気配で巣を飛び出し余り遠くへは行かず、樹の枝に止まり、警戒しているようすであった。そのうち、巣の中のヒナが飛び出して親の鳴き声のする方へ移動した。すると、親鳥は翼をひろげ、擬傷しながら注意をひかせる行為をすると同時に、ブッシュの中へヒナを誘っているようであった。

こうした擬傷は、イカルチドリやコチドリなどにみられるものと同様に知的なもので、本能的な反射による動作であろう。

この巣を発見され、教えていただいた対馬高校堀教諭は野鳥の研究家でもあり、キャリア豊かな方であるが、ホオジロの擬傷行動はまだ観察したことがないという。最後ではあるが、種々ご教示いただいた堀教諭へ厚くお礼申し上げます。

(県立対馬高等学校)

ヤマシヨウビンの記録

浦田明夫

ヤマシヨウビン *Hakcyon pileata* は少ない旅鳥であるが、琉球列島や対馬では比較的良好に観察される非常に色あでやかな鳥である。はじめて見る人はそのあでやかさに驚嘆するほどである。これまで筆者は4回観察することができた。普通、川、水たまり、沼、水田、干がた等に近い枝や電線等にとまり、カエルやカニなどを捕食する。飛ぶ時、翼の紺色の中の大きな白斑はよく目立ち、また赤いくちばしが特徴的である。

1. 1983年5月8日 (雑木林) 巖原町豆般
2. 1986年5月10日 (干がた) 美津島町洲藻
3. 1986年5月11日 (雑木林) 上県町佐護
4. 1986年5月25日 (水田) 美津島町洲藻

(県立対馬高等学校)

対馬におけるムクドリの記録

浦田明夫

ムクドリは、長崎県では比較的良好の出合いの少ない鳥で、筆者の調べた範囲では対馬からの報告はないようである。先般 (1986年4月5日) 上県町で鳥類調査を行った折、はからずもムクドリの群を確認することができたので記録しておく。

1986年4月5日 / . 上県町越高 17羽
志多留 20羽
田ノ浜 9羽

なお、この日は望遠レンズを所持していなかったので、標準レンズを使って電線に止っている17羽 (越高) を撮影し記録にとどめた。

~~~~~ 沓岐のツル便り ~~~~~  
~~~~~ 浦川 虎 郷 ~~~~~

去る7月4日の朝日新聞（夕刊）によると、出水に飛来するツルのうち、ナベヅルはハバロフスクの南方約200kmのプリモルスク地区ピギン川流域の繁殖から来ており、マナヅルは中国黒江省ザルーンの自然保護区のツル繁殖センターから来ていることがわかったということです。

ソ連からのナベヅルは、山口県の八代に一部がとどまり、残りの大部分は出水に行くが、マナヅルは、中国から対馬・沓岐を経て出水へいっていると考えられます。

ところで、沓岐郡のツルの記録ですが

- | | | |
|--------------------|---------|------|
| ○ 1978. 3. 16～4. 8 | 芦辺町中山干拓 | / 羽 |
| ○ 1979. 2. 16～27 | 芦辺町当田新田 | 7羽 |
| ○ 1981. 2. 21～22 | 芦辺町深江田原 | 数十羽 |
| ○ 1985. 3. 1 ~ 3 | 芦辺町深江田原 | / 2羽 |
| ○ 1986. 3. 16 | 芦辺町深江田原 | 22羽 |

があり、いずれもマナヅルばかりです。

また、1986年11月4日と13日には、南下するツルの群が観察できました。

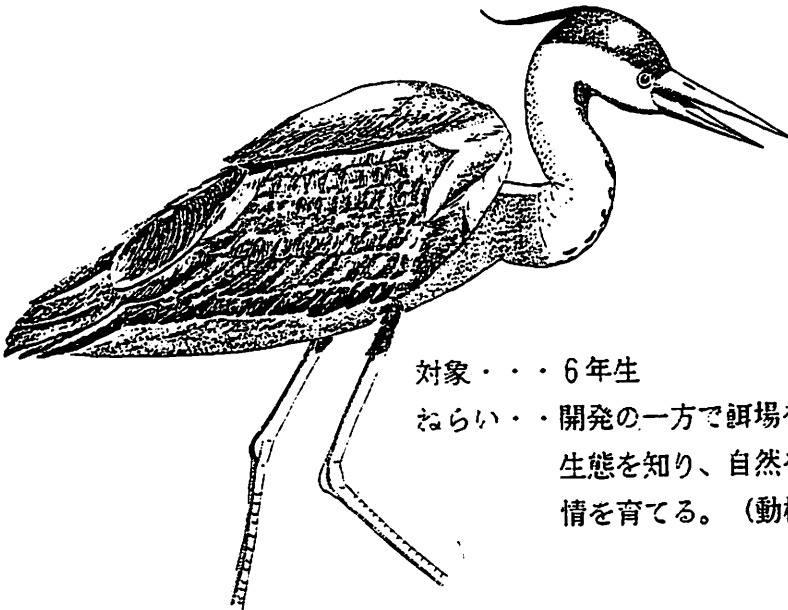
沓岐の記録には古くタンチョウやナベヅルの記録もあるようですが、朝日新聞の報道は一応裏付けられるようです。

（郷ノ浦町立武生水中学校）

「アオサギよいつまでも」

平山 俊章

*今年活動が少なかったため、研究の成果らしいものはありませんでした。そこで、アオサギを題材とした自作道徳資料を使用しての、授業の実践報告をすることにします。なお、この記事は、昭和61年12月1日発行の「長崎県教育会報」第37号に掲載されたものです。



対象・・・6年生

ねらい・・・開発の一方で餌場を失っていくアオサギの生態を知り、自然を大切にしようとする心情を育てる。(動植物愛護)

「アオサギよいつまでも」

対馬の美津島町樽ヶ浜は、あそ¹⁾う湾に面した小さな集落です。かつては、上島と下島を結ぶ渡海船の発着港としてにぎわいのあったところです。

この地区からは、約50名の小学生が、車一台分しか通れない危険な道を登校しています。その道をはさんで、一方には、ひらの山があり、他方には広い湿地が広がっています。

ひらの山には、毎年二月末になるとアオサギの群れが必ず集まってきます。このような場所は、九州には三ヶ所²⁾しかありません。

アオサギは、全体的に灰色がかったツルに似た鳥です。大きな羽を広げてふわりと空をまう姿には、いつも心をひきつけられます。

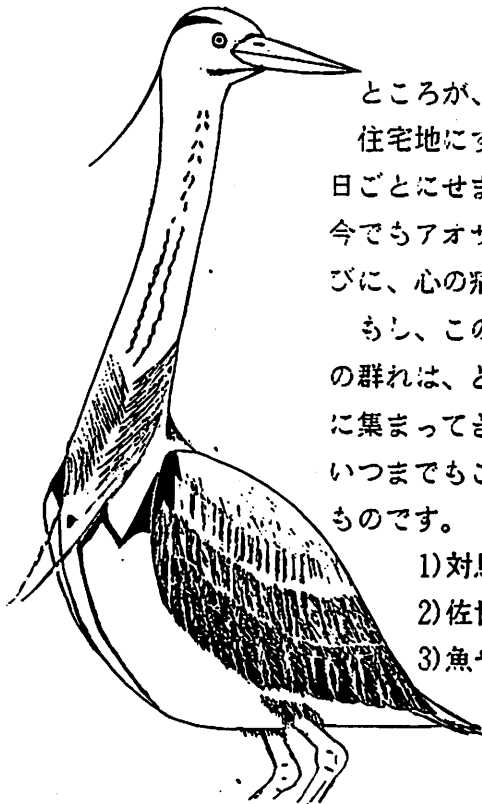
三月になると夫婦で巣作りを始めます。この山だけで50を越える巣が出来上がります。それは、まるで鳥の団地のようです。

卵を生んでからは、交替で温めます。おすが餌³⁾取りに出かけた後、めすは長い時で6時間あまりも温め続けることもあります。やがて、おすが帰ってくると、めすは、空に向かって一声力強くクワッと鳴きます。それは、「よく無事で帰ってきてくれましたね。」と、喜びの気持ちを表しているように聞こえるのです。

ひな鳥の誕生とともに、親鳥の交替はあわただしくなります。ひなに与える餌を取ってこななければならないからです。

三カ月もたつと、ひな鳥は、もう親鳥と変わらぬぐういに成長し、まず、飛ぶことを覚えます。飛ぶことを覚えたひな鳥は、次に、すぐふもとの湿地で餌の取り方を覚えます。こうして、だんだん一人前になっていくのです。

アオサギが、このひらの山に集まってくるのは、外敵が侵入しにくい高い木が残されていることと、ひな鳥が、餌を取る練習場としての湿地があったからなのです。



ところが、この湿地が、突然埋め立てられ始めたのです。住宅地にするためと、せまかった道を広くするためです。日ごとにせまくなっていく湿地には、夕暮れ時ともなると今でもアオサギたちの姿がみられます。そんな姿を見るたびに、心の痛む思いがするのです。

もし、この湿地が埋め立てられてしまったら、アオサギの群れは、どうなるのでしょうか。来年もまた、ひらの山に集まってきてくれるのでしょうか。できることならば、いつまでもこの地に集まり、その勇壮な姿を見せてほしいものです。

- 1) 対馬の中央部に位置するリアス式海岸の美しい海
- 2) 佐世保・鹿児島
- 3) 魚やカニなど

上記の自作教材をもとに、次のように学習を展開しました。

まず、導入では、身近な鳥に続いてアオサギのスライドを見せ、関心を高めました。次に、教材文を読ませたあと、生態を知らせるうえで、さらにスライドをみせました。ここまできて時間にせまられ、十分な意見の出し合いができません。感想文を書かせました。感想文には、次のようなものがありました。

◎……子育ては、とても大変だと思った。人間は、湿地など、あまり埋め立てをしないようにしなければならぬと思う。……やっぱり鳥も生きなければならぬから、人間も協力しなければいけないと思う。(神宮)

◎アオサギが、集団でひなを育てるようなめずらしい所が、ぼく達の身近な所にあるなんて知らなかった。母鳥が苦勞して子どもを育てるのを見て、あの湿地は残すべきだと思った。しかし、この対馬でも、自然がくずされていくのは、悲しいとおもう。(川上)

この授業は、道徳の授業としては、全くの失敗でした。アオサギにとっていかに湿地が大切なものであるかを説明することに多くの時間を費やしすぎて、主題にせまる論議のないままに終わってしまいました。道徳の授業である以上もっと、主題を追求する過程を大切にすべきだったとおもいます。

さて、論議する段にはいたりませんでした。私の意図していた意見が、子どもたちの感想の中に見られました。それは、アオサギを守るために湿地を残すべきだとする意見と、道路の拡張は子どもたちの安全のために必要なのではないかという相反する意見です。

私のねらいとしては、その二つの意見について、授業で論議していきながら人間と自然との共存の必要性に気づかせたかったのです。具体的には、開発の必要性を認め合うとともに、一方で生活圏をうばわれていくアオサギのために埋め立てを最少限にとどめ、いくらかでも湿地を残したらよいのではないかという意見がでるところまで、授業を深めていきたかったのです。

今回、そこまで展開できなかったのは、まず、導入でのスライドの枚数が多かったためでしょう。アオサギの写真だけでよかったようです。それに、教材文が長いことも原因です。事前に読ませておいたり、さらに文章を精選しておく必要もありそうです。

こうした反省のもとに、再度、この教材に挑戦してみたいと思います。

(美津島町立鷓鴣小学校)

木坂海神社社叢にヒゼンマユミ 佐伯正 発

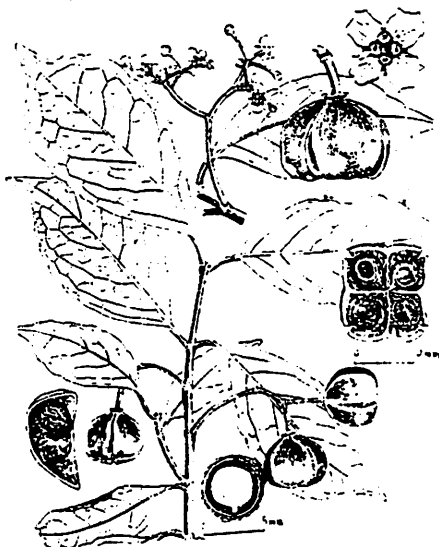
木坂神社の社叢には海辺の社務所から奥の石段付近まで、クロマツの大木がみごとである。(最近切られた新しい切り株が3株ほどあったが、松くい虫のためではないかと心配である。) 松林の下には、ツワブキが一面に黄花をつけて、いちだんと美しい。

社殿を取りまく、この原始林の主な樹種は、クロマツのほかスダジイの老木やオガタマノキ、ヤブツバキ、タブ、

スギ、サカキ、ヒサカキ、ハマビワ、クロキ、カクレミノ、トベラ、クスノキ、ケヤキ、ヤブニッケイ、ヤツデ、イヌビワ、イヌシデ、ノグルミ、ハマセンダンなどであるが、この中に対馬ではめずらしい / 本の木を見つけた。(理科教育協会主催の夏季現地観察会のとき) さっそく外山先生にみていただき、この木がヒゼンマユミであることを確認した。樹形や樹皮が、サカキやヤブニッケイなどに似ているため、目立たず、これらと混生して気づきにくい。果実はマサキやマユミに似て特徴がある。

外山三郎著「長崎県の天然記念物」によると、明治39年に大村の千葉三郎氏が 早市の城山で発見し、牧野先生によって肥前に産するマユミという意味でヒゼンマユミと名づけ、その学名は発見者の姓を記念して、*Euonymus chibai* MAKINO と学界に発表された。と記述している。

この木がどうして木坂神社の社 に / 本だけなのか興味をもったので、去る / / 月24日に社叢に立ち入り調査した。本殿正面の石段左側に2本



ヒゼンマユミ (図鑑より)

右側に3本、野鳥の観察道入口付近に5本、計9本をせまい範囲に確認した大きいもので幹のまわりが約25cm、高さが4.5m、小さいものは高さが30cmほどであった。

ヒゼンマユミは一般に高さ5mほどの小 木で（棟早市城山公園のヒゼンマユミは特別大きく、幹のまわりが2mをこす高木である。）同じニシキギ科の他のマユミ類とはことなり常緑である。樹幹は黒かっ色をし、枝は緑色で平滑、葉には柄があり、濃緑色をし対生、長卵形で先がきゅうにとがる。基部は細まり縁には上 $\frac{2}{3}$ に低い鋸歯がある。質はやや厚く平滑で、長さは10cm内外、春、葉腋からしゅうさん花序をだし、淡緑色の小花を開く。四稜形をした果実は、秋から冬にかけて黄色に熟し、やがて裂けて朱紅色の種子があらわれる。

ヒゼンマユミは暖地に生じ、現在までの発見地は鹿児島、大分、福岡（沖の島）、沖縄、山口、南朝の小島、県下では 早のほか、島原半島の山田、北高の湯江、森山、飯盛、そして大村で見ついている。

対馬のニシキギ科植物としては、(1)ツルウメモドキ (2)テリハツルウメモドキ (3)オオツルウメモドキ (4)マユミ (5)コマユミ (6)ツリバナの6種が「対馬の生物」に記録されている。もしかすると、その木なら、あそこで見た。ここで見たと言われる方があるかも知れない。見かけられた方があれば御一報願いたい。

ところで、この社 のヒゼンマユミが天然のものか、人為的に植樹されたものか興味を覚える。一見サカキに樹形や樹皮の色が似ているので、かつてだれかが、どこからか持ち帰って植えたものが増えているのではないかと、わがままな想像もできる。木坂神社の社叢は、野鳥の森としてよく知られるようになったが、植物の方にももっと関心をもってほしい。参拝道や境内の主な樹木に名札でもつけてはどうだろうかと提案したい。

初冬の空は今にも降り出しそうで、風はつめたかったが、野鳥の観察道を

落ち葉を踏みふみ、紅葉や黄葉をながめ、ヒヨドリの声を聞き、キジバトやコウライキジに出会い、楽しいヒゼンマユミの調査だった。

(巖原町立久田小学校)

HITOTSUBATAGO NO. 4

ツレサギソウの発見

国分英俊

5月11日の対馬縦断観察会の折、ツレサギソウが発見されたので報告しておく。場所は、上県町内の山頂付近の草原で2株が国分たかねにより発見された。ツレサギソウは、中島一男（植物学雑誌 S17）が久原で発見したのが最初のように今回の自生地は2番目の記録となる。

島内では大変めずらしいラン科植物で、私も見るのははじめてであった。自生地は、陽がよく当たるススキの草原であり、開花期によほど注意しないと発見しにくいであろう。

ツレサギソウ

北海道から九州までの山野の林内、あるいは向陽の湿地に生える多年草で、冬期は地上部はかれる。5月中旬～6月上旬まで長い白い花を数十咲かせる。

(巖原町立巖原中学校)

志多賀川流域の水生昆虫
小宮秀光

昭和6/年2月から同3月までに調査した志多賀川流域の水生昆虫の記録を報告する。

採集方法は、小石の上部や下部に付着しているものをピンセットあるいは、網で行った。小石の層だけの採集なので見逃した種も多い。厳密な採集方法ができていないのが残念である。今後、上流、中流、下流によるすみわけの実態調査も必要だろう。

「蜉蝣目」

(ヒラタカゲロウ科)

◎ヒラタカゲロウ属

・エルモンヒラタカゲロウ (多)

(モンカゲロウ科)

◎モンカゲロウ属

・モンカゲロウ

(フタオカゲロウ科)

◎ヒメフタオカゲロウ属

・キョウトヒメフタオカゲロウ
けい流に多く大型である。

(トビイロカゲロウ科)

◎トビイロカゲロウ属

・ヒメトビイロカゲロウ

個体数は非常に多く、地面あるいは地中をはいまわっている。泥まじりの小石層に特に多い。

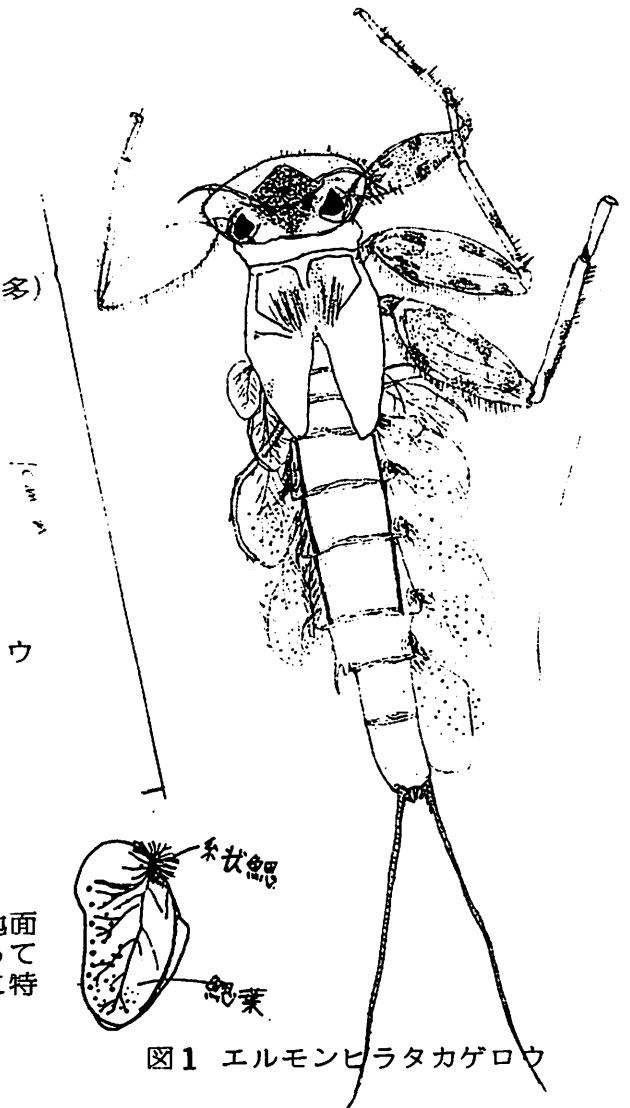


図1 エルモンヒラタカゲロウ

(マダラカゲロウ科)

◎マダラカゲロウ属

- ・種の同定 (未)

「横翅目」

(カワゲラ科)

◎カワゲラ属

- ・クロヒゲカワゲラ
けい流に多い

◎フタツメカワゲラ属

- ・ヌエキフタツメカワゲラモドキ
小石に泥層のある所でよく見かける。

◎ミドリカワゲラ科

- ・種の同定 (未)

「広翅目」

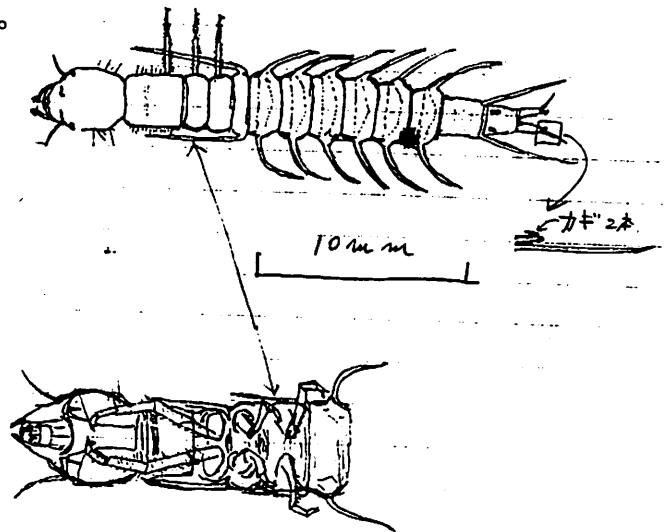
「ヘビトンボ科」

- ・ヘビトンボ
・タイリククロスジヘビトンボ

この2種はすみわけしているようすがない。2種とも上流より下流でよく見かける。

図2 タイリククロスジヘビトンボ

円すい状突起の基部
があい離れている



(峰町立志多賀中学校)

対馬の蛾・分布資料(1) 境 良 朗

対馬の蛾類についての報告は、現在まで二百数十編に達している。特に、渡辺 徳 (対馬の蛾類 1980) 氏および MOTHS OF JAPAN (井上ほか、1982) によって分布種数は飛躍的に増大した。/ 500 種近くが公表されているが、さらに調査が進めば 2000 種前後に落ちつくものと思われる。

筆者は、蝶類調査のかたわら、わずかな時間であるが蛾の採集を行ってきたが、今回は / 977 年 ~ / 982 年までに採集したものの中から種名が判明したものについて報告しておきたい。前記の MJ 発刊後も次々と日本未記録種や新種が発見されているのが現状であるから、当然筆者の手もとにも同定できない種が残されている。

◎ 採集目録

○ 82-9-12 とは、1982 年 9 月 12 日のことである。

○ 採集地について

下県郡美津島町 賀谷 (G) : GAYA

芦浦 (Y) : YOSHIGAURA で表した。

○ 特に採集者を記していないのは、すべて筆者採集・保管による。

○ 学名および和名は、MOTHS OF JAPAN (井上ほか、1982 講談社) に従った。和名のあとに (図版ページ・解説ページ) を付した。

TORTRICOIDAE ハマキガ科

(1) *Epiblema foenella* Linnaeus ヨモギネムシガ (28・134)

81-9-13 (G) / ex 82-9-7 (Y) / ex

82-9-8 (G) / ex

ZYGAENIDAE マダラガ科

(1) *Eterusia aedea* Clerck オキナワルリチラシ (33・292)

81-9-23 (G) / ex

- (2) *Balataea octomaculata* Bremer ヤホシホソマダラ (32・294)

82-6-10 (Y) / ex

LIMACODIDAE イラガ科

- (1) *Latoia sinica* Moore クロシタアオイラガ (34・300)

82-6-16 (Y) / ex

THYRIDIDAE マドガ科

- (1) *Rhodoneura vittula* Guenee マダラマドガ (35・305)

82-4-25 (Y) / ex

PYRALIDAE メイガ科

- (1) *Pattissa fulvosparsa* Butler キボシオオメイガ (36・308)

82-4-29 (G) / ex

- (2) *Scirpophaga* sp. シロオオメイガの一種 (一・308~309)

81-9-13 (G) / ex

- (3) *Japonichilo bleszynskii* Okano チャバネツトガ (37・318)

82-6-10 (Y) / ex おそらく対馬新記録

- (4) *Catachena alysoni* Whalley クロスカシトガリノメイガ (38・328)

82-5-4 (Y) / ex

- (5) *Ancylolomia japonica* Zeller ツトガ (38・326)

82-6-6 (Y) / ex

- (6) *Hedylepta misera* Buler ヒメクロミスジノメイガ (39・340)

82-9-9 (G) / ex

- (7) *Goniorhynchus exemplaris* Hampson クロスノメイガ (39・341)

82-5-12 (Y) / ex

- (8) *Pleuroptya chlorophanta* Butler ホソミスジノメイガ (40・344)

81-9-16 (G) / ex

- (9) *Sylepta taiwanaris* Shibuya タイワンモンキノメイガ (40・344)

82-6-7 (Y) / ex

- (10) *Palpiila inusitata* Butler ヒメシロノメイガ (40・346)

81-9-23 (G) / ex

- (11) *Circobotys aurealis* Leech キベリハネボソノメイガ (41・351)

82-5-23 (Y) / ex

- (12) *Maraca testulalis* Hubner マメノメイガ (41・352)

81-9-23 (G) / ex

